

不登校の実態把握と対応策の検討Ⅱ

— 「心の天気」による子どもの心情把握と大阪市における不登校対策から —

昨年度、調査分析グループでは「不登校の実態把握と対応策の検討Ⅱ」と「学力向上に向けた児童のつまずきの把握Ⅱ」をテーマに研究を行いました。

本号では、「不登校の実態把握と対応策の検討Ⅱ」の研究内容より、『心の天気』による子どもの心情把握についてご紹介します。

研究の詳細は、大阪市総合教育センターのホームページに「大阪市総合教育センター研究紀要 第3号」として掲載していますのでご覧ください。

<https://www.city.osaka.lg.jp/kyoiku/cmsfiles/contents/0000651/651064/20253.pdf>



大阪市総合教育センター 研究紀要 第3号

1. 調査の目的・方法

校種や学年ごとの「心の天気」の入力状況を把握し、

①児童生徒の心情をどの程度捉えているか※1、また、

②天気を選択割合による欠席リスク※2について調査分析しました。

※1 「心の天気」の妥当性検証調査として、調査日「朝」の「心の天気」と「DSRS-Cバールソン児童用抑うつ性尺度」及び「心情の数値化」との関連をJonckheere-Terpstra検定とSpearmanの順位相関によって順序性を分析

※2 「心の天気」の「あめ」の選択割合と欠席リスクとの関連をロジスティック回帰分析を用いて検討



はれ



あめ



くもり



かみなり

2. 調査の対象

令和7年度に調査分析グループにて調査を依頼・実施した学校（小学校3・5・6年生、中学校2・3年生）

3. 結果① 「心の天気」は児童生徒の心情をどの程度捉えているか？

【分析1】「心の天気」と「DSRS-Cバールソン児童用抑うつ性尺度」との関連

「心の天気」
の入力状況「DSRS-Cバールソン
児童用抑うつ性尺
度」の点数

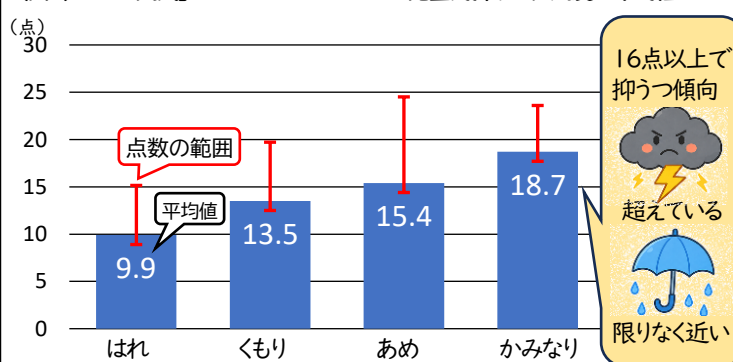
「DSRS-Cバールソン児童用抑うつ性尺度」は18項目3件法から構成され、36点満点中16点以上で抑うつ傾向と定義します。

各天気ごとのDSRS-Cバールソン児童用抑うつ性尺度の平均値(図1)を分析すると、「はれ」が9.9点、「くもり」が13.5点、「あめ」が15.4点、「かみなり」が18.7点であり、抑うつ傾向と判断される16点に「あめ」は限りなく近く、「かみなり」は16点を超える結果となりました。

また、それぞれの天気における抑うつ傾向の児童生徒の割合を比較したところ、選択した天気と抑うつ傾向の児童生徒の割合に強い相関が認められました。

(図2)

(図1) 「心の天気」ごとDSRS-Cバールソン児童用抑うつ性尺度の平均値



「はれ」

(16.0%)



「くもり」

(37.2%)



「あめ」

(57.1%)



「かみなり」

(77.8%)



抑うつ傾向
の割合
高

(図2) 「心の天気」ごと抑うつ傾向の児童生徒の割合の比較

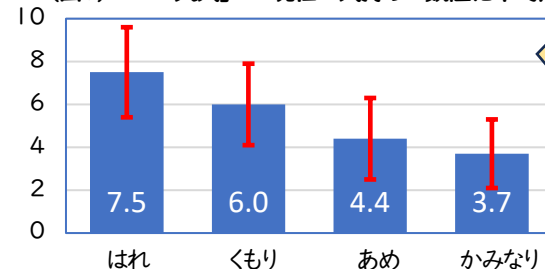
【分析2】「心の天気」と「心情の数値化」との関連



「心情の数値化」は、「今の気持ちを、一番悪いときを1、一番良いときを10とすると、どのくらいですか」という質問項目のもと、10段階で回答を求めたものです。

各天気ごとの平均値の分析をすると、「はれ」は7.5点、「くもり」は6.0点、「あめ」は4.4点、「かみなり」は3.7点となり、「はれ」から「かみなり」へと一貫した低下が認められる結果となりました。(図3)

(点)(図3)「心の天気」ごとの現在の気持ちの数値化平均点



「心の天気」と児童生徒の主観的な心情は関連している

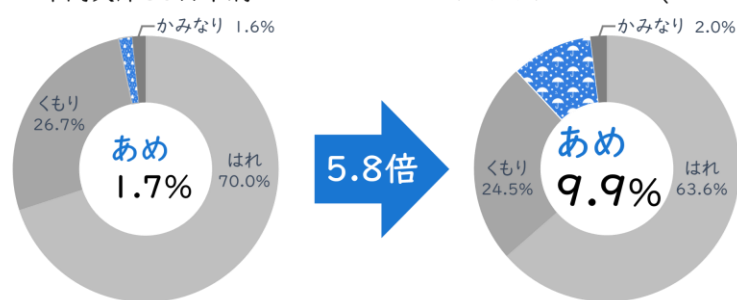


【分析1】【分析2】のいずれにおいても、「心の天気」の選択は、「はれ」>「くもり」>「あめ」>「かみなり」という順序で、抑うつ傾向および主観的な心情と有意に関連することが示されました。特に、「あめ」および「かみなり」を選択した児童生徒は、抑うつ傾向の割合が高い結果となり、これらの選択が心理的な不調のサインとなり得ることが分かりました。

4. 結果② 天気の選択割合による欠席リスク

年間欠席30日未満

年間欠席30日以上(不登校)

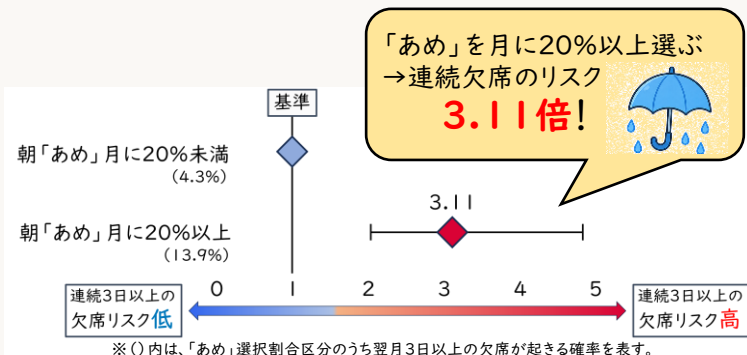


(図4) 朝の「心の天気」選択割合

年間の欠席日数が30日以上の児童生徒を「不登校」と定義し、令和6年度1年間における出席状況と「心の天気」の選択割合を分析しました。(図4) その結果、「朝」の「心の天気」における「あめ」の選択割合は、**不登校児童生徒において登校児童生徒の約5.8倍**でした。

さらに、3日以上欠席を不登校の予兆として扱い※、前月1か月間の「心の天気」における「あめ」の割合と翌月に3日以上欠席する件数との関連を分析しました。(図5) その結果、「あめ」を月に20%以上選ぶ群は、翌月3日以上連続欠席のリスクが**3.11倍**高い結果となりました。

※教委校第7号(令和7年4月14日付け)生活指導の充実における「不登校に係る報告のあり方について(いじめ重大事態)」より



(図5) 朝「あめ」の割合と翌月3日以上連続欠席との関連



「あめ」を月に20%以上選ぶことは、毎日「朝」に「心の天気」を入力している場合、月に4回以上「あめ」が選択される状態に相当します。したがって、「心の天気」を日常的に入力している場合、**月に4回程度の「あめ」の選択が確認された時点**を、声かけや見守り等を行う具体的な目安になると考えられます。

5. まとめ

不登校の要因には、教員からは「見えにくい」不安や抑うつなど、児童生徒の内面的な要因が関係している場合があります。こうした心情を把握するためのツールとして「心の天気」があり、本研究結果からも、児童生徒の心理状態を一定程度反映していることが示唆されました。

本研究で調べた出席状況からも、新学期が始まり、学校生活に慣れてくる5月から6月頃は、不登校が増えやすい時期だと考えられます。「心の天気」はあくまで心身の状態を捉えるための一つの指標ですが、「あめ」が続いている場合には欠席リスクの兆候として受け止め、日頃の様子や出席状況なども踏まえながら、丁寧に見守っていくことが大切です。

